

《注》

- (1) 坪井洋文 一九八九「神道の神と民俗的神」 未来社
- (2) 長谷川政春 一九八三「折口信夫の神—その身体性の意味—」『東横国文学』第十五号
- (3) 坪井洋文 一九八〇「刈敷考—日本人の農耕観—」(第三十二回)日本民俗学会年会
- 同 一九八三「日本人の再生観—稲作農耕民と稲作農耕民の再生原理—」日本民俗文化大系第二卷「太陽と月—古代人の宇宙観と死生観—」小学館
- (4) 野本寛一 一九九三「稲作と太陽」『稲作民俗文化論』雄山閣
- (5) 小島摩文 一九九九「薩摩日置八幡御田植祭考」下野敏見編『民俗宗教と生活伝承』岩田書院
- (6) 神野善治 一九九一「黒潮の漁撈儀礼 予祝呪術の諸相—」海と列島文化7「黒潮の道」小学館
- (7) 野本寛一 一九九五「海女と年中行事—予祝行事と資源保全を中心として—」『海岸環境民俗論』白水社
- (8) 永松 敦 一九九九「九州山地の風祭り—阿蘇信仰における風除けの民俗—」季刊第二次「悠久」第七十九号・鶴岡八幡宮悠久事務局
- (9) 吉野裕子 一九八〇「狐」法政大学出版局  
(〒630-8424 奈良県奈良市春日苑一―103四―10)

書評

赤坂 憲雄 著  
山野河海まんだら

—東北から民俗誌を織る—

評者 菅 豊

豊

A5判/446ページ  
本体価格:3,300円  
1999年4月刊  
筑摩書房

一 はじめに

民俗学は、「落日の中にある」(山折 一九九五 一七)らしい。民俗学が、そういう「落日の中にある」のにもかわらぬ、奇特なことに、本書の著者はこの学問とともに生きることを、この本を纏めあげる旅のなかで決断した。著者は、「落日の民俗学とともに生きることを、みずから選び取」(本書 九)り、「民俗学者として立ってゆく覚悟」を固めたことを、何度も繰り返している(本書 九、四二八、四四二)。

著者が、そのなかで生きていくことに覚悟をしなければならぬほど、衰えた「民俗学」とは、いったいなにか。狭義のアカデミズムという制度的な枠組みから、リジッドであることを求められる不自由な「民俗学」なのか、それとも、単純に民俗を対象とするという緩やかな枠組みで括られた一見ふくよかな、でも夢想的な「民俗学」なのか、判然としない。経験主義

的な確からしさを旨とする評者としては、ここはひとまず不自由で形式的な手法と視点で、本書をレビューするしか仕方がない。

二 民俗誌としての位置づけ

「いま  
紡がれる  
あらたな  
民俗誌  
深まりゆく黄昏の季節に、  
あらたな民俗学をめざして、  
まんだらを織る旅がはじめられる。  
山野河海に抱かれ、  
その豊かな恵みによって  
生かされてあった、  
東北の村々。

いま、最後の民俗誌が紡がれる。」  
これは、本書の帯の言葉である。  
本書は、民俗誌として紡がれた。そして、その民俗誌は、いまままでにない「あらたな」民俗誌を標榜するものとして紡がれた。少々気恥ずかしささえ覚えるこのキャッチコピーは、編集者のコマース的な戦略的意図によって書かれたのか、それと

も著者の本意なのか、定かではない。しかし、少なくとも、著者自身、本書を編む作業を、「あらたな」民俗誌を模索する作業と位置づけていることは、内容を一読すれば明らかである。したがって、本書は民俗学における民俗誌論のなかで、批評されなければならない。

著者は、「あたらしい」と考える民俗誌の紡ぎ方を確信をもって意図的に採用した。それは、「民俗誌の記述のなかに、いかにして生きられた全体性を回復することができるか」(本書 一一)という、大きな目標に到達するためには、やむを得ないことであった。そして、その到達の後に、あらたな、もうひとつの民俗学が出現せねばならないと切実に感じられる著者にとっては必然であった。現在の民俗学が、学問としての耐用年数が過ぎていくにもかかわらず、いまだに旧態のまま脱皮と変身を遂げていないとする著者の現状認識は、至って正当である。その現状を変えようとして、この時代に可能な民俗誌を紡ぎ出すようと奮闘する著者の姿勢は、まず全面的に評価されてしかるべきである。

それでは、この民俗誌の「あたらしさ」とは、なにか。「明らかに、これまでの民俗誌の常道を大きく踏み外した記述のスタイルと内容であり、こんなものは民俗誌ではない、という批判」(本書 一一)をも、著者に覚悟させる「あたらしさ」とは、なにか。つまびらかにする必要がある。

評者は、かつて民俗誌の可能性について、学説史的に考察し

たことがある(菅 一九九二)。そこでは、民俗誌は本来、民俗事象の束をまとめ整理する「民俗資料集」としての役割が期待されていたことを指摘した。たとえば、柳田国男は、民俗誌を、民俗学に資料を提供するものとしてしか位置づけておらず、「民俗資料集」の域を超えて評価をしていなかった。柳田にあって、民俗誌とは民間伝承の「発見と採録」でしかなく、民俗学こそが、それを「整頓し解説する」方法であったのである(柳田 一九二九 一六〇)。

「なぜに農民は貧なりや」の根本問題を提示し、そういう実地的な眼前の疑問への解答を提示するものとして民俗学—この時点では「郷土研究」といった方が的確である—があると語り、その学問が救世するという志を吐露する(柳田 一九三五 九三—九四) 柳田にとつて、民俗誌は、その崇高なる民俗学にあくまで従属するものだったのであり、消極的な意味しかもちえなかった。学問救世、経世済民という言葉にあらわれるように、民俗学は、現前の社会問題を解決することを使命—あくまで理想でしかなかったが—としていた。その実用の僕である民俗学に情報を供給するものとして、「民俗資料集」型民俗誌は成立した。そのため、多くの民俗誌は個性のない整然とした類型的な構成となっていく。

ところが、このような民俗学の初志が忘れられつつあった一九七〇年代半ばに、民俗誌自体に社会問題を解決する役割が期待されるようになる。たとえば、坪井洋文などは、民俗誌を民

俗学におけるインプットの過程から、民俗学のアウトプットの過程へと展開しようとした(坪井 一九七四 六〇八)。それは、本書で著者が民俗学に危機感を抱くのと同じく、民俗学の現状を憂えることからはじまった。坪井は、民俗学が社会へ実践、貢献するための方法として民俗誌があると、積極的に民俗誌を評価したのである。このような「社会叙述」型の民俗誌に関する言説は、なにも坪井に限定されるのではなく、それ以降多くの人々にみられる(岩崎・鈴木・松田・山本 一九七七年)し、また、実際すでに具体的な民俗誌というかたちで、提示されている(出口 一九九六)。

著者は、「フィールドから得られる生の情報の集積である民俗誌が、民俗学的な知を支え、その学としての組織化のための血肉となる」(本書 九)と考へ、「民俗学と民俗誌はたがいこたいに補いあう関係にある」(本書 九)と位置づける。すなわち、著者にとつて民俗誌は、いままでの「社会叙述」型民俗誌と同じく積極的に評価されるものである。さらに、著者は、あらたな民俗誌を模索することなしに、あたらしい民俗学は生まれないうとまで言い切る。この姿勢は、著者が改革の矛先とした旧来の民俗学の唱道者・柳田国男とは明らかに異質ではあるが、民俗誌の研究史的な流れから考えると、「この時代に可能な民俗誌」(本書 一一)、「この時代が必要としている民俗誌」(本書 一二)を旨とする本書は、「社会叙述」型の民俗誌の流れに、やはり位置づけられるべきであろう。

### 三 斬新な記述スタイル

著者は、意図的に既存の「民俗誌のヒエラルキーからは距離を取り、秩序だった事項の配列を壊すことに」(本書 一一)腐心した。ここで述べられる「秩序だった事項の配列」とは、従来の「民俗資料集」型民俗誌に、ままみられた類型的な事項の配列を指すのであろう。そのような、よくある「民俗資料集」型民俗誌の構成と比べると、確かに本書は、独自の構成をもち、描かれた社会や、個人に即応できている。

全体はまず、第一部山野の章と、第二部河海の章で構成されている。この各部の下には、「熊祭り」、「箕作り」、「森の匠」など、内容を端的にあらわす短い大見出しが各部一〇ずつ、計二〇配されている。この大見出しで括られる部分が、一つひとつのムラである。したがって、二〇のムラを取り扱っていることとなる。さらに、大見出しは、「とんと昔」、「川流れ」、「小鶴舟」など五文字以内の簡潔な小見出しで整理されている。

この構成を、著者は、本書のタイトルにもなっている「まんだら」という、響きのよい言葉に喩える。本書は、もともと新聞連載の小文章を、アンソロジーとしてまとめたものであり、結果としての構成ではないかとも疑いたくもなるが、ここはひとまず著者の主張を信じ、評価しておくべきであろう。

記述スタイルでいえば、このような構成とともに、文体やレトリックも「民俗資料集」型民俗誌とは、趣を異にする。ルポ

ルタージユ風の文体、たとえば話者の語りを生かした間接語法をちりばめる表現法は、いままで一部の意欲的な民俗誌(出口 一九九六など)をのぞいてほとんど用いられてこなかった。この手法は、当該社会の人々の声を生かし、状況の生々しき、切実さ、躍動感を伝達するのに成功している。

民俗資料を束ねるだけの「民俗資料集」型民俗誌ではなく「社会叙述」型民俗誌である本書にとつて、構成、文体を個人的にしたのはあくまで正当である。ひとつの作品として完結し、読まれることを重視して作られる「社会叙述」型民俗誌は、叙述する内容にしたがって、その社会を生き生きと描き出すのに有効な手法を柔軟に模索せねばならず、今後本書は、「社会叙述」型民俗誌が増えていくなかで、ひとつの参照例となるであろう。

このような間接語法は、いまだ民俗学界では違和感をもたれるであろうが、民族学・人類学界では、かなり古くから好まれた文体である。ただ、注意しておかなければならないのは、このレトリックが、民族学者・人類学者のあいだでは、現実を伝達する以上のレトリックとして、すでに受け止められていることである。

ダン・スベルベルが「元にはなかった、そして元の話者の理解なり判断なりではなく、報告者のそれを表現する要素が含まれる場合がある」(スベルベル 一九八四 四一—四二)と、間接語法の危うさを指摘するように、間接的に話者の語りで表現する談話が、本来発せられた声にどの程度忠実で、どの程度

似ており、どの程度変えられ、どの程度省略され、どの程度延ばされたかを、読者は知ることができない。間接話法といういかにも、話者に近く、現実に近いようなレトリックが、実際は書き手の思いを話者に仮託して述べる直接話法になってしまいうことがあることに、書き手は自覚的でなければならぬし、また、読み手はただ単純に事実の記述として、受け止めるべきではないのである。

「熊で遊ばせてもらったな、山を教えてもらったな、そう、顔をほころばせながら渋谷志津谷さんがいう。」(本書 七三)

「金打坊あたりのサケは身が真っ赤で、煮ると脂が一面に浮く。昔は高く売れた。いい加減年取ると、みな川で遊ぶようになるな、そう、藤助さんは呟いた。」(本書 三六一)

このふたつの間接話法に共通して語られているのは、自然の豊かさとそれをめぐる生業の特別なあり方である。その生業は、単なる金銭を求めだけの狭義の労働としてではなく、人々の内発的な動機付けに満ち満ちた活動としてある。そのような生業のあり方を表現するのに、「遊び」という言葉を、話者の多くの言葉のなかから見事に擲き上げた。この擲き上げられた言葉は、多分、問題の正鵠を射たものであろう。

しかし、この言葉は話者の生業に対する真の思いであること

もに、著者の民俗社会の生業に対する思いでもある。その思いは、共感―柳田流にいうと「同情」か―というかたちで融合している。その共感、本来は、問題発見の糸口として検証されるべきものであり、問題に対するステレオ・タイプな解答ではない。このような間接話法は、語られたものを結論へとスムーズに帰してしまふ、安上がりな方法となる危険性も孕んでいる。著者が語る、自然と「遊ぶ」仕掛けとしての生業のあり方は、もともと民俗の深みで奮闘努力しなければ、その本当の姿と意味が見出せないのではなからうか(菅 一九九八)。

たとえば、著者は、本書のキーワードとして自然という言葉を用い、自然の大切さを主張する。一方で、現代的な表象としてのエコロジーにもとづく、都市民の自然の関わり方を批判する。つまり、利用を前提とした在地の環境保全の思想を評価する立場をとるのであるが、これは、研究史的にいうと、一九九〇年代初頭から活発になった民俗自然誌や環境民俗学の趨勢と全く同一である。本書に先だって多くの研究者が、自然と人間の関わり合いの問題に取り組んできたが(篠原 一九九〇、一九九五、篠原編 一九九八、鳥越 一九九七、鳥越編 一九九四、鳥越・嘉田編 一九八四、出口 一九九六など)、そこで問題とされる民俗は、本書に比ぶると深いところから汲みあげられている。そのような研究で出てきた結論と本書の主張とが、一見同じであったとしても、はたして同じく評価されてよいものであるか。そういう深みで格闘することなしに得られ

た結論は、どのような民俗学的意味をもつのであろうか。

このような観点から本書を評価すると、本書は民俗の知識技術のとらえ方において、縦の深みにかけてというきらいがある。しかし、一方において、本書は、そのような欠点を補っても余りある横の広がりをもっている。著者の意図には反するかもしれないが、本書にあるエクステンシヴ、かつジェネラルな手法から取り上げられた素材とフィールドは、インテンシヴに重厚な知識を束ねる研究者を惹きつけ、再び取り上げられることであろう。

#### 四 旧態依然とした歴史還元主義

本書において、時折、旧態依然たる歴史還元主義が頭を擡げるのはなぜか。

誤解のないようにあえて述べておくが、評者は歴史的な視角や叙述法を否定するものではない。評者がここで批判する歴史還元主義とは、民俗事象を安易に歴史的に遡上させ、実証的な証左を示さないで古物と結合させる姿勢である。そして、その結果、民俗事象のもつ意味が理解できなかつたとき心持ちになって、思考を停止させるあり方である。柳田以来、多くの研究者が無批判にとっているこの姿勢は、まだ批判され尽くされていない。

「焼畑の歴史は稲作以前にさかのぼる。縄文時代にはすでに、日本列島のあちこちで行なわれていた、と想像されている。(中略)：カノと呼ばれる焼畑はあきらかに、東北の豊かな基層文化を掘り起こすための、大切な手掛かりなのである。」(本書 四七)

いまに存在するカノという焼畑は、どのような脈絡で、縄文時代に遡るものなのか。縄文時代に焼畑があったことを否定できなくとも、それが、現在のカノとどのようにつながるのか。

「採集や狩猟、それに焼畑などを主な生業とした縄文時代には、こうしたブナの森に抱かれた山麓の地こそが、もともと暮らしやすい土地だった。牛房野に縄文の遺跡が残るのは、だから、とても自然なことだ。」(本書 七八)

縄文時代の自然依存型の生活形態を、民俗学がどのような実証的な方法で考究できるであろうか。民俗学風の聞き書きしか、本書で手法として用いていない著者が、どのようにして理解できたのか。著者が重要視する、いまに生きる人々の声は、縄文時代を語るのか。そのようなことを考究することが、民俗学のための目的なのか。

「わたしはしばしば、山村を訪ね歩きながら、縄文時代が

思はれるような光景に出会った。もっとも鮮やかな縄文の影は、たとえば現在も副業として行なわれている、樹皮やツルを使った道具作りのうえに射している気がした。…(中略) …むろん、それをただちに、縄文以来の伝統などということではできないにせよ、そのすべてが中世の修験道以後の光景であるとも思えない。」(本書 四三九)

現代に生きる人々の生活を、豊かな表現力で描ききり、さらにその「いま」の生き様に問題発見を行う著者が、なにゆえに「縄文」の遙か遠き時代の夢想に耽るのか。不自由ながらも確からしさを大事にする学問的常識しか、寄る辺とできない評者には、とうてい素直に理解できるものではない。

しかし、この夢想に込められた構図は、アカデミズムから解放されたメディアや、学問的常識を必要としない読者にとつて、口当たりがよいものなのかもしれない。そして、もしかしたら、著者はこの「口当たりのよさ」を自覚的に利用し、自分の主張を人口に膾炙させるために、この縄文言説を繰り返しているのかもしれない。著者は、本書において、民俗社会、あるいは民俗そのものを「肯定」する思想を貫いているのであるが、その思想をうまく読み手に内服させるためのオブラートとして、この縄文は語られたのであろうか。もし、そうだとすればかなり老練である。

五 民俗誌、そして民俗学の可能性

―「肯定」する学問―

「わたしはひそかに、民俗学は肯定の学問だと思っけています。たくさんの父や母の人生を、村の歴史を肯定すること、その肯定を仲立ちとして、未来に生きるための知恵や技を汲みあげること、それが民俗学という、黄昏の学問に課せられた役割なのかもしれません。」(本書 四三六)

批判能力が欠如しているという批判や、新・保守主義というレッテルを貼られることを恐れず、一種、潔いひらきなおりで主張されたこの言葉には、著者が背景とする思想と、それによって進められる運動の行く末があらわれている。もし、この著者の思想を喧伝し、著者の運動を進展させるのに少しでも役立つのなら、学問という尺度から解き放たれて、夢想的手法を用いることも許されるのかもしれない。評者は、経験主義的な確からしさを重視する視角から本書を評するという立場を忘れて、その思想に共感を覚えてしまう。

二五〇人にもほる人々の声と、二〇カ所にもほる土地の匂いは、この著者の思想によって編み直された。その作業は、「民俗社会それ自体が黄昏てゆく」(本書 一一) なかで、過疎や高齢化、後継者不足などに悩む社会、あるいはそこで暮らす人々を、まず励ます役割をもつ。それは、第一段階では、民俗

社会に住む人々の一人ひとりのなかにある、民俗的な知識や技術を再確認し、その価値を再発見し、自信や誇りをもたせる運動である。そして、次の段階では、その再確認、再発見の主体を、ムラに住む人々から都会に住む人々へと拡大し、現代社会が孕む問題をムラの側から都市民へと再確認、再発見させる運動へとつなげる可能性をもつ。

ここまで、狭い枠組みのなかで本書を評してきたが、民俗学が学問としての整合性よりも、今後、運動としての力強さと有用性をもたねばならないとしたら、本書は別の視点から高く評価されなければならない。「肯定」する民俗学の思想は、現代社会に寄与する運動としての民俗学へと変身させる―これは柳田民俗学の初志を正しく具現化することでもある―大きな可能性を秘めているのである。

【引用文献】

岩崎真幸・鈴木通大・松田精一郎・山本質素 一九七七  
 「民俗誌」の系譜 『日本民俗学』 一一三―一二二  
 篠原 徹 一九九〇 「自然と民俗」 日本エディタースクール出版部  
 一九九五 「海と山の民俗自然誌」 吉川弘文館  
 篠原 徹編 一九九八 「現代民俗学の視点―民俗の技術」 朝倉書店

菅 豊 一九九二 「本当に民俗誌に可能性はあるのか?」 『民俗誌』論・試行と展望』 筑波大学歴史・人類学系民俗学研究室 五―一

菅 豊 一九九八 「深い遊び―マイナー・サブシステムの伝承論」 篠原徹編『現代民俗学の視点―民俗の技術』朝倉書店 二一七―二四六

スperlベル、ダン 一九八四 「人類学とはなにか」 紀伊國屋書店

坪井洋文 一九七四 「自己発見のための民俗誌」 『日本民俗誌大系月報』四 角川書店 六―八

出口晶子 一九九六 『川辺の環境民俗学』 名古屋大学出版会

鳥越皓之 一九九七 『環境社会学の理論と実践』 有斐閣

鳥越皓之編 一九九四 『試みとしての環境民俗学』 雄山閣出版

鳥越皓之・嘉田由紀子編 一九八四 『水と人の環境史』 御茶の水書房

柳田国男 一九二九 「俚入考」 『三宅博士古稀記念論文集』 岡書店(なお本稿は筑摩書房刊定本一五によった)

柳田国男 一九三五 『郷土生活の研究』 刀江書院(なお本稿は筑摩書房刊(一九六七)によった)

山折哲雄 一九九五 『落日の中の日本民俗学』 『フォークロア』七 本阿弥書店 二二―一七

(〒164-0002 東京都中野区上高田四一八一―一七〇二)

諸相」大淵忍爾編「中国人の宗教儀礼 仏教 道教  
民間信仰 福武書店 〇〇八〇・〇八二

例(翻訳書の場合)

スミス、R. J. 一九八二 『現代日本の祖先崇

拝(上、下) 前山隆訳 御茶の水書房

(一) 欧文の参考文献についても、これに準じますが、  
書名に副題があればコロン(…)を付し、書名にはア  
ンダーラインを付してください。翻訳がある場合には、  
出版年の後に「」に翻訳の出版年を記し、最後に「

(一)内に翻訳 題名、翻訳者、出版社を記してください。  
例(単行本の場合)

OUWEHAND Cornelius 1964 [1979] Namazue and  
their Themes: An Interpretative

Approach to Some Aspects of Japanese Folk

Religion E.J.Brill 『鯨鯨 民俗的想像力の世界』小松

和彦他訳 せりか書房

例(論文の場合)

WOLF Arthur P. 1974 Gods, spirits, and Ancestors

In A.P.WOLF (ed.), Religion and Ritual in Chinese

Society, Stanford University Press 131-182

文献の配列は、著者の姓の五十音順またはアルファ  
ベット順とし、まとめて記してください。

八、〔図版〕図版は原則として、執筆者自身が必ず黒で  
トレースしてください。図版は、図、表ごとに別紙  
に書き、本文とは別に一括して添えてください。図、  
表ごとに通し番号をつけ、それぞれにタイトル、説明  
ならびに出典などをつけ、本文原稿の欄外に挿入箇所  
を明記してください。印刷所でトレースしなす場合、  
超過分の実費を負担していただくことがあります。

写真も図および表に準じた通し番号、タイトル、説  
明並びに出典などをつけ、同様に挿入箇所を指定して  
ください。写りが明瞭でないものは、お断りすること  
があります。

(この投稿規定および執筆要領は平成十一年三月の理事  
会の了承を得て改正するものです。『日本民俗学』編集  
委員会)

### 編集後記

ある民俗学者によると、民俗学の危機は民俗資料という「対象の消失」では  
なく、「独自の視点で、周囲に転がっているたくさん文化現象に『民俗』と  
いうラベルを貼れなくなっている」という状況に問題があると指摘しています  
が、まさに正鵠を射た考えのひとつといえます。この考えに注目し、多くの人  
が議論して今日の閉塞的な状況の打破をめざすならば、今後の民俗学にとって  
新しい出発の可能性が期待できるのではないかと考えています。

今号は、柳田國男論、伝統薬の民俗医療文化論、祭り論に関する論文を掲載  
することができました。各論文はいずれも独自に新しい視点を開拓し、意欲的  
に取り組んだ力作であるといえます。

最近は、論文、研究ノートやフォーラム欄と比較すると、調査報告の投稿が  
少ない点が残念です。今後も民俗学の活性化に向け、独自の視点で捉えた「調  
査報告」も投稿されることを期待しています。同時に、会員全員が本誌である  
『日本民俗学』をネットワークの拠点としてさらに活用されることを願って止  
みません。できるならば、今回のフォーラム欄には現在の視点に立脚した小  
論「宮田登論の必要性」が投稿されていますが、これをひとつの起爆剤として、  
あとに続いてほしいものです。(M・S)

### 日本民俗学 第222号

発行 2000(平成12)年5月31日  
編集兼 日本民俗学会  
発行者 眞野俊和  
代表者 〒113-0034 東京都文京区湯島4-12-3  
TEL・FAX 03-5815-2265  
E-mail folklore@pop21.odn.ne.jp  
振替口座 00100-3-536466  
印刷所 株式会社 三協社  
〒164-0011 東京都中野区中央4-8-9

編集担当理事  
板橋春夫 岩本通弥 新谷尚紀  
鈴木正崇 鈴木通大 谷口 貢  
古家信平  
英文担当  
福島スーザン  
編集事務補佐  
南風舎

会員頒布 会費年額 8,000円(入会を希望する方は学会事務局までお問い合わせください。)